

平成31年2月15日（金）

### 国立大学前期入学試験まであと10日

そろそろ、私立大学の合否も少しずつ開いている時期だ。とともに、本番となる国立大学前期試験も近づいてきている。

私立大学の入学試験をこなしながら、国立大学の赤本学習を何回となく繰り返すことが大切である。ほとんどの赤本は、過去5年分の試験問題が掲載されているので、直近のものは繰り返し見ることが重要であるとともに、5年前の赤本を見ると10年前までの問題が解くことができるし、10年前の赤本を見ると15年前までの問題が、15年前の赤本を見ると20年前の問題にまでさかのぼって点検することができる。

担当者が変わるはずなので、そこまでさかのぼることが本当に大切であるかどうかは、今一つ定かではないが、作問者においては、20年前くらいの問題までは、一通り点検してから作問に入ることは間違いない。

直近の5年間の問題とかぶることはおそらく許されないはずだが、20年前の重要な問題について、違う角度から作問したいと考えるのは人の子の道理といっても過言ではない。

助手や助教授・准教授が自分が解いてみて苦労した覚えのある問題について、こんな角度からなら今の生徒に解かせてみたいと考えることはありがたいことではないか。

もっとも、私の専門科目である現代文では、同じ文章が出ることはおそらく可能性はゼロに等しい。新しい文章と考え方が載っている文章が星の数ほど毎年出版されるからだ。

だが、しかし、全部で4問作問する場合、出典からして1問に相当苦労した場合、残りの3問については、オーソドックスな作問になるはずだし、全体のバランスから平均点を想定して、おそらく40点ぐらいにした場合、合格者はきっと60点以上の点数が必要と仮定して作問されるだろうから、ある程度基礎力で得点できる部分をちりばめながら、この程度はわかってよという部分を2割ほど作問に取り入れるはずであろうから、その部分を割り出していく作業が過去問対策のねらいとなるのだ。

まかり間違っても、平均点が下がった場合、基礎力を見る部分の配点を変えて漢字ひとつ5点などとするも予想されるので、これは間違っただけとはいえないところは確実に得点し、この部分はこの大学の特徴だなというところを見つけ出して狙っていくと、必ず合格の扉が自動ドアのごとく開き出すのである。

前期の後は後期試験だ。私立に逃げた部分を後から埋め合わせるのは後期試験の中からのので、必ず受けておくことが第一である。これホント。

